

---

# 少女の

スケープゴート

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
少女の

【Nコード】  
N6096L

【作者名】  
スケープゴート

【あらすじ】  
殺された少女と女の追憶

## （前書き）

実を言うとこれは初の投稿の短編になるはずの作品でした！

手違いで投稿してなくて…

初めての作品ですので文章も拙くて意味がわからないところも多い  
と思います。

あらすじも書かなくて即興で書いたものですから…

若干同性愛者の描写がありますので注意してください。

そう、わたしは彼女のことを忘れはしないでしょうね。

初めてあんなに人を深く想ったんだもの。簡単に忘れるなんてできないわ。

するりするりとかわしていくのが得意な子だったけれど、最後に会った彼女の表情はひどく穏やかで紳士だった。

彼女、このあと自分がどんな目にあうかなんて予想してたはずなのだから、誰かに話しておきたかったんだわ。

話も誰かの好意も悪意も、なんでも知らん顔でかわしていける彼女は、本当は誰よりも愛してほしかった寂しがり屋だったんですもの。彼女の周りから人が引いた後に何気なく浮かべる悲しそうな顔。

何か言いたげに開く口。

誰もいなくなつた教室では伸ばそうとした腕で自分を抱きしめて慰めて。

誰よりも誰かに愛してほしかった彼女。

誰よりも心に寂しさを抱えていた彼女。

わたしはそんな愛らしい彼女をずっと見つめてきた。

初めて目に触れたその時から。

好奇心から一方通行の友情に、憧れに思慕に気持ちを変えて彼女を見てきた。

そんなわたしを彼女も知っていた。見られていることくらい気づいていたんだわ、きっと。

だから誰よりも遠くて誰よりも近いわたしを彼女はわたしを選んだんだわ。

賢くてずるくて愛らしい彼女。

心にため込んだ思いのすべてを誰かに話しておきたくて。誰かに自分のことを覚えていてほしくて。

でも、心に溜めた思いは彼女にしてみれば多くの人には知られたく

なかったことなのでしょうね。

秋のある日の放課後。

夕焼けは朱い波になって教室を呑みこんでいた。

背の高い影。

朱い水に侵された空気。

窓は閉まっていて風は入ってこなかった。

動きのない静かな教室で、彼女は一人席に着いていた。

長くはない黒髪が金色に照っていた。

グランドを見下ろせる窓のほうを見て、彼女は静かに息をしていた。そんな彼女をわたしはいつものようにうしろの開いた扉に背を預けて眺めていた。

壁に掛けた時計の音も運動部の生徒の声も聞こえない。

奇妙なくらいの静寂の幕はわずかに口を開いた彼女の吐息で破られた。

「あたし、こんなに夕焼けをじっくり見たことってない」

溶け込むような言葉の後からつるりと滑るように言葉が流れ出す。

ほんととは誰かに聞いてほしかったことがたくさんあるの。友達でも先生でも知らない大人の人でもよかった。でも、聞いてほしかったんだけど、言っちゃ駄目ってきつく言われていたから言えなかったの。そうすると、たまりにたまった思いが汚れて腐ってドロドロに溶けてきちゃってわたしの身体から腐った匂いが漂うようになってきちゃって。どうしようもなくなってしまうって。だから、最後の時に一人だけにわたしの思いを聞いてもらおうと考えたの。一人って言ってもだれでもいいってわけにはいかなかったんだけど。あたしのこれからいうことを独り言として聞いてくれて、それを誰にも言わない人。できればどうしようもないくらいにあたしに惚れてくれている人。恋愛感情だけが惚れてるって言うんじゃないよ。とにかく、わたしを独り占めしようとしてくれる人。こんなことを臆面もなく言い切れるなんてって思うかもしれないけど、最後だもん。こ

のくらい恥ずかしくもない。わたしに惚れてる人なんていないかもしれないって初めてのころはそう考えてた。わたしなんかって。でも、いるもんだね。男の人じゃないってことが驚きだったけど。いつから気づいたのかは憶えてないけど、そんなにじつと見つめられてたらすすがに鈍くても気づくよ。ほんととはちよつと気味が悪いなんて思ったりもしたけど、こんなにいい人他にはいないって思ったらそつとしておいていいかなあ、なんて。あの人、あたしのことをあんなに見つめてくるくせしてあたしが困ってる時も一人でいる時も笑ってる時も話しかけてこないんだもの。観察されてる感じ。でも、その距離感がまた、あたしがここで思いを言おうと思わせたわけなんだけど。ああ、ごめんね。湧いてくるままに話してたらごちゃごちゃになっちゃったね。あたしが言いたいのは、とにかくあたしを知ってて惚れていて、そのくせに関わろうとはしないあの子がいたからあたしはこの教室で安心して心の中に溜まった思いを吐き出すことができるってこと。

ひっきりなしに口から紡がれる言葉。わたしは微動だにしない彼女から目を離すことなく、腕を組んで後ろの扉に背を預けて立っている。

陽は傾いて、のっばの影もまた伸びた。朱い海は深くに沈むように闇の色を混ぜはじめ、隅から暗く浸食してくる。

いとしい彼女の金色に照っていた黒髪は、もうその輝きを暗くしていた。

彼女の告白はここから始まった。

次の日。彼女は連絡を入れずに学校を休んだ。

優等生で、明るく人気のあった彼女を心配するものは多かった。

体調不良かな、早く元気になればいいね、連絡入れないで休むことなんてなかったのにね。

なにも知らないクラスメートたち。誰一人、彼女のことを深く想った人なんていなかったのね。

昨日、彼女が座って思いを告白した席は今日は空白のまま。

さらに翌日。彼女が家で殺されてるのが発見されてニユースになった。

真新しい包丁で何か所も刺されていた。見つけたのは隣の家のおばちゃん。

おとといの夜、彼女の父親が車で出かけたきりだったからおかしいと思っただけ。

学校ですでにその話でもちきりだった。

すぐに集会が開かれ、わたしたちは各自家に帰された。

しばらく、ニユースで彼女のことが取り上げられ続けた。

なんでも、逃亡して行方不明になった彼女の父親を容疑者として追っている。

なんでも、近所の人には彼女の母親は母の介護のために実家に帰っていると話していた。

なんでも、彼女の母親の母は二年前から娘との連絡が途切れていて、実家に顔を出していない。

そわそわと落ち着かなく、悲しみにくれた様子のクラスを眺めながら、わたしはひとりあの日の告白を思い返していた。

葬式にはクラスの全員が参加した。涙を流し顔を歪めているクラスメートたちの中でわたしは一人、少しだけ眉を寄せただけでいた。涙は流れない。

それから少し経った。彼女の机は教室から追い出され、クラスの雰囲気も微かに色づいてきて、ニユースの話題が移り変わってきたころ。新たな情報が流れた。

彼女の父親が隣の県の山奥で死体で見つかったということだった。

彼女が死んで三カ月が経った日のことだった。

当時のクラスメートはもう彼女のことを頻繁に思い出すことはない。

なんせ十年以上も前のことだから。

アルバムを見て、彼女の顔をようやく思い出す程度の人もあるんじゃないかしら。

世間はすでに忘れていくでしょう。似たような事件くらいあちこちらで起こっているんだから。

わたしは3年前に結婚した。少しぼつちやりとした穏やかな顔の男性。

勤めていた仕事も結婚を機に辞めた。

祝福された結婚。

けれど、どんな時でもわたしは彼女のことを忘れたことはなかった。

誰よりも愛されたがりの彼女。

誰よりも寂しがり屋の彼女。

クラスの人気者で、明るくて優等生だった彼女。

上手にはぐらかしてかわすのが上手だった彼女。

彼女のあの日の告白は、独り言だった。

ただ一人それを聞いた私は彼女のことを忘れられない。

そして、忘れられないわたしの元に彼女は時々やってくる。

朱い海を漂うような夕焼けに呑み込まれた日には、ふっと目の前に陰りができて彼女がわたしに会いに来る。

死んだはずの彼女はわたしが背を向けた赤銅色の木製の箆笥の前に現れたりする。どこにいても、彼女はわたしの視界の端にやってくる。

幻なのは知ってるわ。

長くはない髪の毛は陽に当たりながらも真っ黒で、伸びた白い足は少女の細さのままだから。

彼女の独り言の告白を聞いて、彼女を忘れられないわたしに彼女はあの日と変わらない声でささやくの。

わたしをわすれないで、って。

忘れるわけじゃない。

そして、あの日の告白を、すべての真相を語った独り言を、与えら



れなかった愛情を求めた思いを、わたしは誰にも話さない。

目に焼きついて耳から離れない彼女のすべてはわたしのものだわ。

わたしは彼女を愛してる。

愛されたがりで寂しがり屋で殺された少女に、わたしは心を捧げたのだから。

（後書き）

最初に言うでごめんなさい！

いろいろと恥ずかしいのですが、小説読んでくださってありがとうございます！  
ございます！

この殺された「彼女」の独り言ですが、結局書かなかったのは「わたし」が「彼女」の思いを酌んだということです。

「彼女」の告白の内容ですが、母親が父に殺されて…という感じの告白でした。

母親の死体はバラバラにされて父親が自殺した山の中に袋に入れて埋められているという設定でした。

書かなくてすいません。

なにはともあれ、ここまで読んでいただいてありがとうございます！  
た。

意味不明だったと思います…。

こんな感じでゆっくりですが書いていこうと思っています。

できればこれからもよろしく願います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6096l/>

---

少女の

2010年10月20日13時20分発行